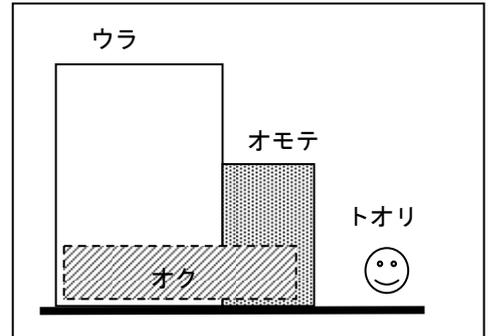


1. 暮らしの視線・眼に優しい景観

職住共存地区では、「心休まる」と言わないまでも、「眼に優しい」「疲れない」景観が望まれる。地区内のマンション（マンションのある町並み）を見て歩いたが、眼が疲れる。かついいデザイナーズ・マンションもなぜか疲れる。そんな中で空が開けるとほっとする。個々の建物をじっくり鑑賞するようにつめるのではなく、何となくまちを歩く「暮らしの視線」からは、全体的なまちの印象や開放感が大事で、スカイラインや天空の光や風などのアバウトで身体感覚や半無意識に訴えるような都市環境が重要。ビジターにとっても、暮らしの感覚は重要。（一級品でなくとも）

例えば元・明倫幼稚園の向こうに見える空が抜けていて気持ちが良い。樹木もある。横のホテルはチープな作りではあるが、それを妨げない。そのようなスポットが所々にあることが大事。ごちゃごちゃした通りも、ある程度ラインや色がそろって見えると落ち着く（姉小路室町）。また、新町通の様に立派な町家がある場合、それを基調にした景観形成（おたべやくろちく）は納得できる。テーマパークというよりも、二人羽織、文楽のような「お約束芸」ではないか。人形（オモテ）と黒子（ウラ）の関係。路地や通り抜けのような奥行きのある景観も良い（オク）。本能館のスケール感・通り抜けはいいが、素材が「眼に痛い」。

一つの建物をじっくり正面から見るとはなく、群として斜めにザーッと舐めるような（概観する）見方で、私たちは、まず町並みを体感する。個々の建物はかなり小さく見え気にならない。そのような構図（周辺の建物との連続感）を乱さないようなスケール感、色彩、素材を選択すれば「眼に優しい」景観が生まれる。



- 地域によって特色のある既存の町並みを手本にした連鎖的なデザイン
- 歴史・伝統という意味性よりも、まず、「柔らかい」「潤いのある」といったプリミティブな感覚
- オモテ（道に面した低層部や外構）、ウラ（背景となる中層部）、オク（奥行き、路地）の組合せ

2. 個々の建物の気合いや気遣い

その上で、ひとつひとつの建物を見ると、なるほど気合いの入ったものや、手抜きのものがある。気合いの入ったものには知恵や時間やお金がかかっている「恥ずかしくない」建物。地元企業が施主・所有者となる場合が多い。もちろんそれほど余裕の無い個人が、分譲マンションを買ったり、銀行から借金して自分の土地に学生マンションを建てたりする場合もある。そのような多様な人々の中から、気合いや気遣いを引き出すには、京都まちなかの心の琴線に触れるような「景観の哲学」を語らなければならない。

直接の答えにはならないが、京都まちなかの人々にとって「守る」「受け継ぐ」が重要な動機付けとなる。相続した土地を守り続ける（相続税で物納した土地を取り返した S さん）、親や師匠から受け継いだ技と生業を守り、継承する（A さんの松の屏風）、地域の祭事やしきたりを継承する（一度魂を入れたお地藏さんは守り続けなければいけない）・・・が重要な動機となる。

かつては乳幼児の死亡率が高かったため、地藏盆や祇園祭などにも子どもを大切に京都人の思いがこめられている。子どもに対する愛情はもちろんだが、受け継ぐことの使命・宿命と裏腹である。伝統と創造の関係も然り。土地や家業や地域産業を守り、受け渡す。そのためにも革新が必要だ。そんな使命と宿命の中から、気合いや気遣いの入った建物が生まれるのではないか。

3. コミュニティと景観の再生

この十年間に都心部の人口は大きく入れ替わり、50%以上はマンション住民である。景観を支えるコミュニティと文化をいかに育てるかが、今後の課題であるが、コミュニティの再生と景観の再生はパラレルに進行するのではないか？

既存不適格と言われながらも、今のマンションは数十年間建ち続ける。建て替えではなく大規模改修の際のリデザインで、（住民にできる範囲で）地域共生型に変えて行けるとい希望を示すべきだ。

セットバックしたマンションの（駐車場を減らして）前庭をつくるのもいい。足元（地べた）の小さな景観に意外な楽しさがあり、近所づきあいの可能性もある。（2005 年度第 5 回セミナー記録「歩いて楽しむ京都まちなか」の「歩く視線の面白さ」など参照。http://www.gakugei-pub.jp/judi/semina/s0505/index.htm）

かつてのお町内は、木戸門で町を閉ざし、通りを共有の場とした濃密な空間であった。共有できる原風景、記憶に残る景観がコミュニティの核になる。それには、意味的なシンボル（歴史・伝統）もあるだろうし、五感に感じる魅力のある場づくりもあるだろう。

田の字地区北西部(城巽、龍池、明倫、本能学区)の世帯数・人口推移

年次		城巽・龍池・明倫・本能、4学区合計									
		世帯数	人口総数			人口 性比	1世帯当 たり人員	人口 密度	対前回増加数		面積
			総数	男	女				世帯数	人口	
昭和22年	1947年	4,114	16,736	8,124	8,612	94.3	4.07	20,842			0.803
昭和25年	1950年	4,097	18,024	8,865	9,159	96.8	4.40	22,446	-17	1,288	0.803
昭和30年	1955年	3,982	19,010	9,721	9,289	104.7	4.77	23,674	-115	986	0.803
昭和35年	1960年	3,889	18,672	9,704	8,968	108.2	4.80	23,253	-93	-338	0.803
昭和40年	1965年	3,524	16,547	8,319	8,228	101.1	4.70	20,606	-365	-2,125	0.803
昭和45年	1970年	3,421	13,941	6,899	7,042	98.0	4.08	17,361	-103	-2,606	0.803
昭和50年	1975年	3,079	11,252	5,419	5,833	92.9	3.65	14,012	-342	-2,689	0.803
昭和55年	1980年	3,073	9,731	4,573	5,158	88.7	3.17	12,118	-6	-1,521	0.803
昭和60年	1985年	3,179	9,192	4,312	4,880	88.4	2.89	11,447	106	-539	0.803
平成 2年	1990年	3,311	8,442	3,932	4,510	87.2	2.55	10,320	132	-750	0.818
平成 7年	1995年	3,541	8,178	3,754	4,424	84.9	2.31	9,998	230	-264	0.818
平成12年	2000年	5,365	10,402	4,728	5,674	83.3	1.94	12,716	1,824	2,224	0.818
平成 17年	2005年	7,808	13,864	6,215	7,649	81.3	1.78	16,949	2,443	3,462	0.818

※1995年から2005年の人口の伸びは170%(明倫学区では約200%の伸び)

※1995年から2005年で子ども(15歳未満)は776人から1252人へ(伸びは約160%、人口構成比は9%前後で推移)

※1960年以前の面積は一部不明だったので、1965年に合わせた

※4学区は、おおむね大通り沿道(田の字)と職住共存地区(あんこ)からなる

